

編集後記

<編集顧問>

鈴木 秋悦
武田 佳彦
青野 敏博

<編集委員>

岡井 崇
神崎 秀陽
倉智 博久

〈社会の要請〉

前号の編集後記に記した「スーパー母体搬送システム」の案が本日の東京都周産期医療協議会で了承され、協議会の決定として正式に都に報告される運びとなりました。ともにこのシステムの樹立を目指してきた日赤医療センターの杉本部長とは喜びを分かち合い、日大産婦人科の山本教授には深く感謝すると同時に、発案者として感慨ひとかたならぬ思いがしています。

しかし、東京都では、一般救急医療の領域でも搬送困難事例は少なく、救急医療の担当者からはなぜ母体救命にだけ特別なシステムが必要なのかとの疑問を呈されてもおります。

母体救急患者を受け入れるには複数の関連科が対応可能な状態でなければならない、その条件を満たす医療機関が見つからない時間帯もあります。それがこのシステムを必要とする理由であることはいうにおよびませんが、背景には社会の思いがあるのだという気がします。

出産に際して、母親となるべき人が児を残して命を失うという悲劇は人の心に大きな衝撃を与えます。命の重みに差がある訳ではありませんが、普通の人が脳卒中で倒れたときに搬送の遅れが命を失う結果をもたらした場合と、母体救急で同じ事態が起こったのでは、社会が感じる悲惨さの程度が違うのでしょうか。ですから、そのことを知っているメディアの反応が異なるのです。その意味では、母体の命を救うことへの国民と社会の強い要請がわれわれ医療提供者を動かしたといえるかも知れません。

それにしても、今更ながらマスメディアの力を痛感させられた気がします。メディアがあのように大きく報道しなければ、「スーパー母体搬送システム」はできていなかったのですから。

(岡井 崇)